

銀杏

発行所

〒792-0835
新居浜市山根町8番1号
曹洞宗瑞應寺専門僧堂
編集発行人 村上 徳 存
電話(0897)41-6563
FAX(0897)40-3127毎月1日発行
(振替 01330-2-31918)
瑞應寺
印刷所 東田印刷株式会社

碧巖録物語独語【十二】

後堂 門 原 信 典

三教老人の序①

この三教老人は、碧巖録を焼き尽くした大慧禅師の派に属する居士（在家に在って禅を修行する人）で、如居士顔丙と云います。道教・儒教・佛教を三教と云い、その三つの教えは根本において一つ、と云う三教一致の禅を説きます。

しかし道元禅師は三教一致を「不学のいたりなり」と否定されています。

道教は中国固有の宗教で、不老不死を理想とする現世での幸福を求めます。儒教

「是」とは正しい、良いという意味です。

【目く、皆な是なり】

三教老人は、どちらも正しい道筋だと示されます。それをこれから参究していきます。

【齧齧東に來たり】

齧はむき出しの歯。齧は虫歯。齧齧は達磨大師の事です。達磨大師がインドから中国に禅を伝えた為に当時の思想家に迫害を受けて歯が欠けていたという伝説により、欠歯道士とも呼ばれるそうです。

【心印を単伝して、文字を立てざることは固なり】

達磨大師は文字でも言語でも学問でも思想でもない、この生身の私の実践である坐禅を伝えられました。

心印は佛心印。佛道修行の心印、印は印可証明ですが、免許皆伝の巻物のようなものがあるわけではありません。師匠から弟子に佛法が伝わる、つまり坐禅が伝わる。

【禪は梵語のdhyana、ディヤーナの音訳で禪那と表現されますが、もともとの字義は

「天を祭る祭儀」とあり、禅譲と使い「天子の位をゆずる」意味です。

しかし、字を見ると、示す偏に「單」です。この傍の「單」は「ただ一つ、すべて、まこと」などの意味もあります。それこそ独語（独り言）になりませんが、単なる音訳ではなく、この「單」にこそ大事な働きがあります。

字の通り禅は「この一人の坐に佛様の全てを示す」修行。師匠から弟子に伝わるのは、文字や言句であらわされる個人的な計らいではなく、坐禅という佛様を示す生き方です。

私は嗣法（佛法を受け嗣ぐ）の時に、師匠より「我々の家風は脚下照顧、下座行に徹する事」と伝えていただきました。そして「瑞應寺に行つて本物に成れ」と。

それは「瑞應寺で真実の自己を修行して来い」という事でした。

とても本物に成ったとは思えませんが、今瑞應寺で

大衆との同行同修こそが、そのまま報恩行として私が師匠から受け継いだ脚下照顧、下座行の「心印」です。

「文字を立てざる」と読みましたが、「心印」は不立文字がピッタリ来ます。

不立は一つという事。文字と一つに成る。葛藤そのもの。一般には葛藤は迷いですが、葛や蔓がまとわりついて一つになる、つまり師匠と私がつになる事。師匠の教え（文字）と私の修行が一つになる事です。それが単伝です。普段、私が私だと主張している自我だけの自分が、佛道修行している私にまとわりつかれて自我が身動き出来なくなる事でもあります。

【而れども「血脈」「帰空」の諸論、果して誰か之を為るや】

しかし、この文字を使った「血脈論」や「帰空論」は誰が何の為に作ったのか。という事です。古くから達磨大師の語録として「少室六門」或いは「達磨大師三論」が有ります。

禅学大辞典には「血脉論」

は実際には達磨大師の名前を借りて撰述されたとあります。「帰空論」は不明でした。

「古に「文字に在らず、文字を離れず」と謂うは、真に知言なる已」

この不在文字、不離文字ですが、正法眼蔵葛藤の巻、景德伝灯録の「菩提達磨章」には達磨大師が道副、尼総持、道育、慧可の四人の弟子に法を授ける。つまり「心印」を「単伝」する場面があり「皮肉骨髓」と言われています。

それぞれ四人の弟子達に「汝吾が皮を得たり」「吾が肉を得たり」「吾が骨を得たり」「吾が髓を得たり」と宣言されます。普通に読みますと「皮・肉・骨・髓」と優劣浅深があると思いますが、実はそれぞれが身体を構成する重要な部分であり、一つ一つが身体そのもの、生命そのものです。つまりは四人の弟子はそれぞれ達磨大師の分身なのです。

達磨大師が言われました。

「いよいよ機は熟して時が来た、それぞれに得たところを言つて見なさい」と。

その時に弟子の道副が「我が今の所見の如きは、文字を執せず、文字を離れずして、しかも道用をなす」と答え、達磨大師は「汝、吾が皮を得たり」と認められます。「私の今の修行は、不執文字、不離文字の修行です、それが仏道の働き(道用)です」「知言」は言葉の真意を知っている。

ここに不執文字、不離文字とありますが、不在文字の出典はわかりません。

道元禅師が、真実の仏法を学びに中国に渡られて間もない頃、老典座(年老いた調理をされる係)との問答が「典座教訓」にあります。道元禅師は「いかなるか是れ文字」と問われ、老典座は「二三四五」と答え。更に禅師が問います。「いかなるか是れ辨道」すると「偏界かつて蔵さず」と答えられます。

道元禅師は仏道修行について問われるのですが、この「文

字」は道元禅師が今まで学んできた「仏様の教え」の事。

それは「二三四五」つまり「どれもこれもが仏様の姿と声」と老典座は答えられました。

「では仏道修行とは何ですか」と再問されると「私の生活、私の周りが全て修行している」と答えられるのです。

そこで、この「文字」を「佛様」に置き換えて「佛様は在らず、佛様に執せず、佛様と離れず」と読めば、私の一切の修行、日常の全ての行持が佛様と一つだから、これこそはという特別な佛様はそこに存在しないし、執着も出来ません。しかし佛様とはいっても一緒です。

それは私自身が佛様そのものの道用だからです。

文字の実践こそが真の文字の働きであり、文字の真意です。

これからは長慶慧稜禅師、径山涂毒禅師、俱胝和尚、玄沙山宗一大師、更に迦葉尊者、阿難尊者の「不立文字」を示されます。(続く)

テレホン法話 〇八九七 四一・〇〇三三

禅のたより



星に願いを

七月と言えば七夕。竹の葉に願い事を書いた沢山の短冊を掛けてあるのを見るようになります。

時代を遡りますと、はるか万葉集の時代。この頃七夕の夜に、神様に対して、守護や豊作をお願いするために川べりで機織りをしました。それが悪魔除け、お祓いの儀式としてもおこなわれるようになり、その祈りの姿が七夕の日に短冊にお願い事を書いて御祈願をするようになりました。

私には、今でも記憶に残る短冊があります。

つたない字で「〇〇ちゃんとお〇〇ちゃんが早く仲直りしますように」と書いてありました。

小学校の低学年ぐらいのお子様でしょうか。友達を思う、大変微笑ましいお願いです。

私はこの微笑ましいお願い事にとっても大切な事を気付かされました。

この相手の事を思う純粋な気持ち、他を利すると書いて利

他と云います。

仏教では「幸せに生きる。心豊かに生きる。そのためには先ず他人の幸せを願う心を育てなさい」と教えます。

私たちは生きています。それは当たり前の事です。

しかし、私が生きていけると云うことが、私はみんなと共に生かされていたのだ。と気づくことは大変難しい事です。

皆様が笑顔の絶えない日々を送るか、いつも顔をしかめる日々を送るか、友達同士の仲直りを願ったこの子供さんのように、まず他の人の幸せを願う心に掛かっているのです。

これを道元禅師様は「己れ未だ度らざる前に一切衆生を度さんと発願し営むなり」とお示しです。

仏道修行は難しいことではありません。

「たとい七歳の女流なりとも即ち四衆の導師なり、衆生の慈父なり。」子供の何気ないお願いに気づかされ思わず手を合わせました。

瑞應寺専門僧堂直録 楠本剛大

令和五年七月一日〜十日

詩 偈



瑞應夏安居 示諸兄弟
佛国安居養道芽
默然端坐遠群邪
聞思修慧淨薰習
瑞應寺頭開百花
至祝至禱

堂長 徳存

瑞應寺夏安居入制
薰風匝地鳥聲回
薔薇花香隔俗埃
啓建首楞嚴勝会
九旬辦道禱無災

監事 信宏

夏安居
有緣轉向入叢林
若輩推揚覺意深
信念堅持功德種
禪僧活計覓安心

首座 義晃

夏安居
安居瑞應古僧堂
得道工夫暫叵忘
知足諦觀空苦惱
禪機妙用法王場

書記 康稔

夏安居
勤精進訓也奇哉
今夏安居拳示来
百尺竿頭移一步
錦心繡口眼睛開

堂行 慧岳

夏安居
尋師晚学衲衣纏
半歲安居日月旋
粥罷降山流水路
謝恩佛國衆中緣

愛知県 智之

夏制中
我脚跟全夢不成
復回予兆仰光明
展開覺悟惟如此
時得忘身一道清

鐘洒 一道

夏安居
瞻仰同居瑞應林
參玄學道得安心
須隨処作主中主
六和敬行慈意深

鐘洒 太一

夏安居
重疊群蛙寂寞心
千峯密鎖濕衣襟
壁前默坐黃梅節
雨季天昏日暮侵

鐘洒 龍衛

夏安居
佛國安居離世緣
崢嶸萬壑仰山顛
久修練行境彌好
密密工夫道念堅

鐘洒 多聞

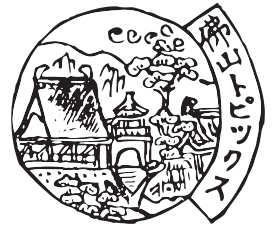
夏安居
流水行雲綠作陰
因緣果熟住叢林
雖天曉暗沛然甚
欲訪宗門佛道深

辦事 慈皓



小祥忌法要

■当山三十世
大慈通元大和尚小祥忌
七月十日(月)、午後二時より当山三十世大慈通元大和尚の小祥忌法要が執り行われた。前日の連夜諷経は門原後堂、当日の献粥諷経は金岡監録が勤め、正當諷経は、広島県三原市宗光寺住職、垣井龍顕老師導



■恵光忌・大玄忌
七月十日(月)、当山元西堂、橋本恵光老師の示寂忌正當諷経を楠本直録の献供により、楞嚴会朝課罷に厳修。
七月二十日(木)には当山二十九世檜崎一光老師の示寂忌正當諷経を門原後堂のもと厳修。



小祥忌法要

師のもと厳修された。一週間前より元安居者の方には、法要準備、山内清掃を始めとして尽力頂き、法要当日には、僧侶合わせて約百人を超える随喜衆により、無事報恩供養を修行した。



法戦式



集合写真

■法戦式
今夏制中、赤松義晃士の法戦式が七月二十日(木)に修行され、「永平頌古・拈華微笑之話」に就いて法問を戦わせた。当日は、僧堂諸役寮師、梅花講、和敬会等随喜した。
また、前晩は門原後堂による本則提唱も行われた。

七月の日鑑

- 一日 祝禱
- 二日 日曜参禅会
大慈通元大和尚
小祥忌連夜法要
- 三日 大慈通元大和尚
小祥忌正當法要
- 五日 参玄会(六日迄)
- 十日 恵光忌
- 十五日 祝禱・略布施
- 十六日 水施食
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿日 大玄忌
- 廿五日 首座法戦式
- 廿六日 先住忌
- 廿七日 略布施

八月の予定

- 一日 祝禱
- 二日 大施食会
- 三日 筆供養・弁天大祭
- 六日 日曜参禅会
- 七日 楞嚴会満散・土地堂念誦
- 八日 小参・人事行礼
- 十五日 祝禱・略布施
- 十六日 水施食
- 十八日 観音講・勉強会
- 廿一日 略布施



鐘 声

先月は先住の大慈通元大和尚小祥忌法要があり、実に百名近い僧侶の方々が来山されました。多くの元安居者の方々に「首座和尚さん、頑張つて。」と親切にもお声かけを頂き、身が引き締まる思いでした。惜しくも通元老師がご健在の内に修行に身を置くことは適いせんでしたが、先日の小祥忌法要に随喜させて頂いたことで、生前のお徳の深さを肌で感ずることができ、非常にありがたい機会に巡り会わせて頂いたのだと実感致しました。

僧堂生活に身を置いて初めて迎えた制中も終わりに差し加かっています。自分の成長と至らなさを同時に感じる濃密な期間となりました。この制中を通じて得た経験の一つ一つ自己の成長へと昇華できるよう、改めて自分自身をじっくりと見つめ直していき、充実した制中として今夏を締めくくるとともに日々励んでいこうと思います。

今夏首座 義晃